

## 商学部における障害者についての講義の影響

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2022-05-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐々木, 美加 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/22522">http://hdl.handle.net/10291/22522</a>

# 商学部における障害者についての講義の影響

佐々木 美 加

## I 障害の有無による教育制度の違いと相互理解

### 1. 教育制度による障害者の健常者との交流不足

障害者とはどういう存在なのか。21世紀の現代社会福祉用語辞典（九州社会福祉研究会，2019）<sup>1)</sup>によると、1975年の国際連合総会で採択された「障害者の権利宣言」の第1項で、「先天的か否かにかかわらず、身体的または精神的能力の不全のために、通常の個人または社会生活に必要なことを確保することが、自分自身では完全にまたは部分的にできない人のことを意味する。」と定義されている。また、障害者基本法第2条において、「『障害者』とは、身体障害、知的障害、精神障害（発達障害を含む）その他の心身の機能の障害（以下『障害』と総称する）があるものであって、障害及び社会的障壁により継続的に日常生活または社会生活に相当な制限を受ける状態にあるものをいう」と規定されている。

障害者にとっての社会的障壁の制限をなくすため、また障害のある児童生徒の自立や社会参加に向けた主体的な取り組みを支援するという視点から、特別支援教育が提供されている。特別支援教育は、知的障害者、発達障害者、肢体不自由者、病弱者及び身体虚弱者、弱視者、難聴者、言語障害者、自閉症・情緒障害者が対象とされている。

新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議（2019）<sup>2)</sup>によれば、2017年5月1日現在において、義務教育全体の全児童数は989万人で

あり、そのうち障害児童の数は全体の4.2%にあたる約41万7千人である。障害者児童のうち、特別支援学校に通う障害児童は全体の0.7%の約7万2千人であり、特別支援学級に通う障害児童は全体の2.4%の約23万6千人、通常の学級に通う障害児童に至っては全体の1.1%（約10万9千人）という少なさである。従って、義務教育段階の児童のうち障害のある児童と障害の無い児童が同じ学校で会う機会があるのは全体の3.5%であり、同じ学級で勉強するのはわずか1.1%にすぎない。こうした現状は、まだノーマライゼーションが十分実現していない状況を露呈している。

## 2. 障害者に対する健常者の態度

障害者が地域生活を営む際、多数の障害のない地域住民からの理解と援助が必要になる。生川（1995）は、障害者のより円滑な社会参加の推進のため地域住民の理解を得ることが必要であると指摘し、障害児に対する健常者の態度を調査によって検討した<sup>3)</sup>。生川の調査では、特に精神遅滞者に対する態度が測定され、精神遅滞者との接触経験のある人の方が無い人に比べて、精神遅滞者と関わろうとする気持ちが強く、地域交流を推進しようという気持ちも強いことが明らかにされ、女性の方が男性よりも精神遅滞児に対して好意的態度が強いことも示された。

河内（2004）は、精神遅滞児だけではなく感覚障害（視覚障害と聴覚障害）、身体障害（運動障害で車いす使用）および可視性が低い内臓疾患などの健康障害についての4障害の条件間で障害者への抵抗感を比較検討している<sup>4)</sup>。その結果、感覚障害よりも運動および健康障害の方が抵抗感が低く、関心度と援助経験が障害者との交流意思を強める効果が見いだされた。

これらの先行研究から、接触経験は障害者と関わろうとする気持ちが促進されることがうかがえる。そこで、本研究では商学部という障害者教育、福祉、あるいはノーマライゼーションについて特に専門的学習を行っていないナイーブな学生に対して、障害者教育について特別講義を実施した。講義中

に障害者の方に登壇していただくことで、障害者への抵抗感は減少しイメージは好意的になるのではないかと予想される。本研究ではそうした福祉関係の専門家の特別講義と障害者の登壇の前後で障害者への抵抗感や態度が変化するかを検討することを目的とし、調査を行う。

## II 方法

### 1. 調査対象

本調査は、2021年10月14日に明治大学商学部で心理学Bの講義において実施されたゲストスピーカーによる特別講義の前後に行われた。特別講義では、国際障害者交流センター ビッグ・アイの副館長の鈴木京子氏による特別講義が行われ、講義後に身体障害のあるダンサーの西村大樹氏が登壇し、自身の経験談を語り、最後にダンスのワークショップが行われた。ワークショップでは、西村氏の教壇上でのダンスワークの教示で、教室の学生がペアになり、ダンスをしながらあっち向いてホイを行った。教室ではペアを組んでワークショップを行ったが、オンライン授業では自宅やパソコン教室から一人で受講していた学生も多かったと思われる、オンライン授業受講者はワークショップには参加ではなく見学という形になったと思われる。尚、特別講義には商学部の心理学Bの受講生及び受講者以外も参加した。

特別講義実施日は10月14日で、東京都内はCOVID-19の感染拡大の第5波がようやく収束の兆しが見られて9月30日に緊急事態宣言が解除されて間もない頃であった。明治大学では10月10日まで活動制限指針が「レベル2」でオンラインのみで授業が行われていた。10月11日から、対面授業が可能だがオンライン授業を活用する「レベル1」に引き下げられたばかりだった。レベル1においては、大規模授業ではオンライン授業を活用することが推奨されており、心理学Bの講義でもオンライン授業を継続していたが、10月14日のゲストスピーカー特別講義では対面とオンラインのハイブリッ

ド授業を行った。レベル1の状況で安全に授業を行うため、対面授業の教室は履修者260名に対し最大収容人数881名の教室を用いてソーシャルディスタンスを保てるよう準備した。オンライン授業はzoomを用いて同時配信とし、授業の映像と音声はKandao Meeting 360度（オールインカンファレンスカメラ）を通して配信した。

残念なことに当日のzoom操作ミスがあり、オンライン授業の方は冒頭の10数分が音声を送られなかった。また、Kandao Meeting 360は、会議室での收音によって受像方向定位を行う機器であったため、zoomの映像配信において演者が適切なタイミングで送られない現象も生じた。一部演者の到着の遅れなどもあり、講義内容も一部変更して行われた。このような状況であったため、今回の特別講義では対面授業とオンライン授業で提供された講義のインパクトはかなり異なっていた可能性が含まれている。

ゲストスピーカーの特別講義の論題は「共創と気づき」で、クラスウェブを通してアナウンスされた。両受講形態での受講者数は、対面授業が約40人、オンライン授業が約90人であった。受講者の受講前の障害者への態度と受講後の障害者への態度を比較するため、特別講義の開始までの1週間（10月7日～10月14日）に講義前のアンケートを実施し、講義直後から1週間（10月14日～10月21日）に講義後アンケートをクラスウェブを通して実施した。

本調査では、講義前アンケートに回答し、かつ特別講義を受講して講義後アンケートに回答した117名（男性60名、女性57名、平均年齢19.02歳、 $SD=.78$ ）を調査対象とした。調査対象の対面授業受講者は46名（男性22名、女性24名）、オンライン授業受講者は71名（男性38名、女性33名）であった。

## 2. 測定項目

### (1) 事前調査

性別、年齢、障害者への関心度を測定する項目（6件法、全く関心がない～非常に関心がある）、障害者感尺度の下位尺度である「交流の場での当惑尺度」（河内，2004）<sup>5)</sup>の8項目について、6件法（全くそう思わない～非常にそう思う）により回答を求めた。他に障害者ボランティアの経験（2件法、ある／ない）、障害者と話した経験（2件法、ある／ない）、障害者のことを知る程度（2件法、そう思う／そう思わない）により回答を求めた。

### (2) 事後調査

受講形態（対面／zoom）に加え、事前調査で用いた質問項目の障害者への関心度、「交流の場での当惑尺度」（河内，2004）<sup>5)</sup>、障害者ボランティアの経験、障害者と話した経験、障害者のことを知る程度を尋ねた。さらに、受講後障害者へのイメージの変化「今回の講演『共創と気づき』を聴講した後、あなたが持つ障害者へのイメージに変化はありましたか」（非常にネガティブになった～非常にポジティブになった）、「障害者との距離が縮まったと感じた」（7件法、全くそう思わない～非常にそう思う）、多様性の認識についての項目（「色々な社会の中で色々な特性の人がいることを感じた」7件法、全くそう思わない～非常にそう思う）の項目を用いた。

自由記述の項目は3項目設定した。①「共創社会と障害についておたずねします。色々な特性の人が同じ場所で一緒に活動するのが当たり前社会にするには、どうしたらいいと思いますか。」②「共創社会と障害についておたずねします。個人特性と障害とは何が違うのでしょうか。あなた自身の考えを書いてください。」③「障害者と健常者がもっと一緒に活動したらよいと思う場面はどんなものですか。それを実現するために何が必要だと思いますか。」

これら自由記述の3項目については、鈴木京子氏・西村大樹両氏に意見を

伺って作成したものであり、今回の論文では分析を除外している。

### Ⅲ 結果

#### 1. 「交流の場での当惑尺度」の受講前後の変化

受講前調査における「交流の場での当惑尺度」(以下、受講前当惑尺度) ( $\alpha=.86$ ) および受講後調査における「交流の場での当惑尺度」(以下、受講後当惑尺度) ( $\alpha=.93$ ) 共に高い信頼性を示した。

先述のように今回の特別講義では対面授業とオンライン授業のハイブリッドで提供された一部の音声画像、ワークショップの参加か見学かが異なっていた。そのため、受講形態の要因の影響も加え、受講前後の要因が「交流の場での当惑尺度」に与える影響を検討した。また、先行研究で性差の影響が一部見いだされているものもあるため、性別要因も加えて検討した。すなわち受講形態および性別を要因として、受講前当惑尺度と受講後当惑尺度に対して反復測定分散分析を行った。その結果、講義の受講前後の効果は有意で ( $F(1, 82)=19.37, p<.000$ )、受講後当惑尺度の得点の方が受講前当惑尺度の得点よりも低くなっていた ( $M=3.15$  and  $3.47$ )。これは特別講義の受講によって障害者との交流での当惑するという感覚が減じられたことを意味する。性別の主効果 ( $F(1, 82)=.22, n.s.$ )、受講形態の主効果 ( $F(1, 82)=.94, n.s.$ ) 及び性別×受講形態の口語作用も有意ではなかった ( $F(1, 82)=.29, n.s.$ )。

#### 2. 障害者へのイメージ変化、障害者との距離感覚、多様性認識と性差・受講形態

次に、障害者へのイメージ変化、障害者との距離の感覚、多様性の認識について、同様に性別と受講形態を独立変数として分散分析を行った。その結果、性別の主効果 ( $F(1, 82)=.25, n.s.$ )、受講形態の主効果 ( $F(1, 82)$

=.49, *n.s.*) 及び性別×受講形態の交互作用も有意ではなかった ( $F=(1, 82)$  =.45, *n.s.*)。従って、受講形態と性差による障害者イメージ変化、障害者との距離感覚、多様性認識に対する有意な影響は見られなかった。

### 3. 障害者へのイメージ変化に影響を与える要因

障害者へのイメージ変化のポジティブティに対する性別、多様性認識、ボランティア経験、障害者接触、交流の場の当惑の受講前後の差（以下、交流当惑の受講前後差）が与える影響について検討した。障害者へのイメージ変化を目的変数、多様性認識、ボランティア経験、障害者接触、交流当惑受講前後差および性別を説明変数として重回帰分析を行った。その結果を表1に示す。

表1に見られるように、障害者へのイメージがポジティブになることに有意な影響を与えているのは、多様性認識と障害者接触と交流の場の当惑の受講前後差であった。多様性認識が高いほど障害者へのイメージはポジティブになり、障害者の接触がある方が障害者へのイメージはポジティブになることが窺える。また交流の場の当惑が受講によって減少した量が多いほど、障害者へのイメージはポジティブになることを意味している。

表1 障害者へのイメージ変化のポジティブティに与える影響

多様性認識	.500**
ボランティア経験	.005
障害者接触	.210*
交流の場の当惑の受講前後の差	.270**
性別	-.042
$R^2$	.384**
$F$	11.49**

\*  $p < .05$

\*\*  $p < .01$



#### 4. 障害者との距離感に影響を与える要因

障害者との距離感に対する各変数の影響を検討するため、障害者との距離感を目的変数、性別、多様性認識、ボランティア経験、障害者接触、交流当惑の受講前後差を説明変数として重回帰分析を行った。その結果を表2に示す。

表2に示すように、障害者との距離が縮まったと感じることに対して、障害者との多様性認識と交流の場の当惑の受講前後の差が有意な正の影響を与えていた。多様性認識が強いほど障害者との距離が縮まったと強く感じ、交流の場の当惑の受講前後の減少量が大きいほど、障害者との距離が縮まったと強く感じることを示された。

表2 障害者との距離感に対する影響

多様性認識	.501**
ボランティア経験	-.075
障害者接触	-.013
交流の場の当惑の受講前後の差	.280**
性別	.040
$R^2$	.329**
$F$	9.24**

\*  $p < .05$

\*\*  $p < .01$

#### IV 考察

本研究は、商学部におけるゲストスピーカー特別講義において、障害者についての講義と身体に障害を持つダンサーの体験談とワークショップの授業を聴講することで、障害者への抵抗感が弱まるかどうかを質問紙調査によっ

て検討した。その結果、過去の研究でも長く使われてきた障害者観尺度の下位項目の、障害者との「交流の場の当惑」の尺度の得点が、講義によって緩和される効果が見いだされた。

さらに、「交流の場の当惑」尺度の受講前後の差は、講義後に障害者のイメージをポジティブにするのを強めることが示された。このことは、健常者と障害者が当惑や戸惑い無く交流することが、障害者のイメージをポジティブに変えることを意味する。また、障害者との接触経験は、過去の研究と同様に障害者のイメージのポジティブ性に貢献していた。

一方、障害者との距離が縮まったという感覚に対しては、障害者との接触経験の有意な影響は見られず、交流の場の当惑尺度の減少量と多様性認識の強さが有意な影響を及ぼすことが見出された。これらの結果は、交流の場での当惑や多様な個性に驚いたり拒否することなく受け入れる姿勢が障害者への抵抗感を減じることにつながることを示していると思われる。

今回の調査で明らかになった最も重要な点は、実際に障害者と健常者が話したり直接共に活動したというわけではなく、講義で講演をただで、受講者に障害者へのイメージの好転や距離を近く感じる点ができた点である。

授業後の感想にも、もっと障害者の人と会う機会を求める声や、こうした特別講義で障害者と交流する機会を求める声が多かった。こうした貴重な体験と効果を受講生に生んでくださった国際交流センターの鈴木京子氏と西村大樹氏に深く感謝を申し上げたい。

#### 参考文献

- 1) 九州社会福祉研究会（編）. 21世紀の現代社会福祉用語辞典：243.
- 2) 新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議. 日本の特別支援教育の状況について. 文部科学省. (2019):162p.
- 3) 生川善雄. 精神遅滞児（者）に対する健常者の態度に関する多次元的研究：態度と接触経験，性，知識との関係. 特殊教育学研究, 1995, 32.4: 11-19.

- 4) 河内清彦. 障害学生との交流に関する健常大学生の自己効力感及び障害者観に及ぼす障害条件, 対人場面及び個人的要因の影響. 教育心理学研究, 2004, 52.4: 437-447.
- 5) 河内清彦. 障害者等との接触経験の質と障害学生との交流に対する健常学生の抵抗感との関連について. 教育心理学研究, 2006, 54.4: 509-521.
- 6) 河内清彦. 「障害学生との交流自己効力感汎用型尺度」の妥当性の検討: 聴覚障害および視覚障害条件の影響について. 特殊教育学研究, 2003, 40.5: 451-461.
- 7) 文部科学省. 特別支援教育について 発達障害者支援法 (平成十六年十二月十日法律第百六十七号) [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/tokubetu/main/1376867.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/main/1376867.htm) (2020年12月25日引用)

(ささき・みか 商学部教授)